CROYD JOHNSTON INTERVIEW

クロイド・ジョンストンが6月頃から日本に滞在しているらしいという噂をきいた我々は，各方面にはたらきかけ，ようやく彼の所在をつきとめた。ここに紹介するのは去る7月30日，新宿「しゃぶ通」において彼と約2時間にわたって行ったインタビューからの抜粋である。インプロヴァイザー／パフォーマーの新世代の中でも極だって異様な態度をとり続けている彼を理解するのに非常に興味深い手がかりとなるのではないだろうか。

クロイド・ジョンストン—この殆ど無名に近いパフォーマーは，'60年代後半から'70年代の中期にかけて，ディヴィッド・トゥープ*やスティーヴ・ベレスフォード*といったパフォーマーによる「新しい動き」の中でそこかしこに姿を現していたが，パフォーマンスの具体的な記録は殆ど私家盤やプライヴェートなテープなどからしかうかがい得ない。"MUSICS"*によれば彼のパフォーマンスは『動物園でのミサ』と評されている。

彼自身の語ったところによれば，1950年北アフリカのアルジェで生まれ，3歳ぐらいまでそこにいたという。両親は商人だったが熱心なカトリック信者で，厳格な家庭環境。だが，彼自身は『一貫して無神論者』であったという。10代の頃初めてビートルズを聞くが，『初めの3分で飽きた』。当時の彼のアイドルは，パリ八重奏団の第2バイオリニスト（氏名不詳）であった。…20歳のときトゥープに出会い，意気投合してデュオ"NOMAN'S NOSE"を結成。だが，ジョンストンが盲腸炎で入院しているうちにそのデュオも自然消滅してしまった。ベレスフォードとも学生時代からのつきあいだというが，何か思い出したくないような出来事が2人の間に起こってそれ以来『偶然に会ったとき以外会わないようにしている』とのことである。

待ち合わせの場所に現れたとき，彼は最近発売された録音もできるタイプのポータブル・ステレオ・カセットレコーダーを肩に掛け，ヘッドフォンをしていた。そのとき彼が聴いていたのは，キンクスの古いライブテープだった。

「『しゃぶしゃぶ』を食えるか」ときくと，「口に入った順になら食える」ということなので，さっそく店に入った。

J（ジョンストン） まず初めに言っておきたいのは，僕はインビューってものを信じてないってことなんだ。普通，インタビューってのは，インタビュアーが常に疑問形で始めて，最後に（笑）ってので終るのが多いだろ。ありゃ芝居にすぎないんだ。あの（笑）ってやつはアメリカのコメディ番組のバックに入る笑い声と同じで，「笑い」のためのキューにすぎないのさ。（笑）になっている部分をもっと分析しなきゃならないはずだ。その当事者たちが何を笑ったつもりになっているのか，どれくらい隔たっているのかを知らなきゃならないはずなんだ。2人の人間が同じ事物について笑ったり怒ったりできるはずがないんだ。本当はだから，話すことだって無意味なのさ。

柳（インタビュアー） わかりました。じゃ，まあ，気軽にはじめましょう。……どうです，「しゃぶしゃぶ」ってのは？　おいしいでしょう。…（J無言で食べている）……えー，僕たちがあなたのことを最初に知ったのは，ブライトンで出てる"ODDS & ENDS"っていう小さな雑誌*からなんですけど，失礼ながらあなたの演奏そのものは全く聴いたことがない訳で。……で，まずあなたが一体どんなパフォーマンスを行ってきたのか，また，これからどういうパフォーマンスを行うつもりなのかを伺いたいのですが……。

J　僕は自分のパフォーマンスについてすごく厳密に考えている。だから君が僕のメティエ（仕事）について無知なのはこれからいろいろ話をする上でとても好都合だし，幸せなことだ。というのは，このインタビューだって僕のパフォーマンスのひとつなんだしね。今まで顔を合わしたことのない誰かと一緒に何かやるのは，すごくスリリングだよ。ちょうど，性病をもってるかもしれない奴とコトをかまえるときみたいにね。「どういうパフォーマンスをやるつもりか」なんて，無意味な質問だネ。

柳　今までにレコードやテープを自主的に発表したことはないんですか？

J　僕自身が作ったものはない。誰かがやってくれてるんだろう。そういうことをしたがる奴は多いからね。僕はそういった記録は全然持っていないんだ。記録を発表するのはフェアじゃない——というのは，リアルタイムなものじゃないからね。オブジェは信用できても，メディアはダメなんだ。時々ディヴィッド（トゥープ）のところで「君と一緒にやったときのだ」なんてテープを聴かされるけど，信じたくないことだ。というのは，僕はパフォーマンスが終るころには気を失ってるか，すっかり寝こんじゃっているのが殆どで，自分で一体何をしていたのか，忘れてしまっていることが多いんだよ。

柳　すると，予め綿密なコンセプトをたててそれをパフォーマンスの形にしていく，といった事はないんでしょうか？

J　コンセプトはもちろんあるさ！　ただ，それがどういうパフォーマンスをひきおこすかは誰にも，僕にもわ

脚註 by 柳（協力：GESO）

***ディヴィッド・トゥープ**　英国人。美学校出のパフォーマー／作曲家。ギター，フルート，自作楽器，その他モロモロを演奏したりしなかったりする。日本で似たような人を捜すなら，鈴木昭男あたりか？

***スティーヴ・ベレスフォード**　英国の書店員／ピアニスト。音楽のための環境でも環境のための音楽でもない音楽と環境の新しい関係を目指しているらしいが，そのパフォーマンスはなぜか聴衆を激怒させるという。

***MUSICS**　英国のフリー・ミュージック・シーンを殆ど網羅した雑誌であったが，現在は廃刊。値段はフリーではなかった。

***ODDS & ENDS**　詳細不明。粗雑なガリ刷りのミニコミで，よくわからない人たちがよくわからないことを書いている。

***M.E.V.**　ミュジカ・エレクトロニカ・ヴィヴァ。1966年にローマで結成された即興演奏集団。かつては聴衆にも参加してもらってやかましくてでたらめな「フリー・ミュージック」を演奏していたこともあるが，ジョンストンはこの頃の彼らを指して言っているのだろう。なお，その後M.E.V.は比較的すっきりした編成のグループとなっており，もちろんプロのミュージシャンしか参加していない。（現在は解散状態らしい。）

からないというだけの事だ。もしかして君は，パフォーマンスってものを，これから起こし得る事態として考えているんじゃないのか？　それならそれは間違いだ。パフォーマンスってのは，常にすでに過去の事でしかないんだ。「こういうパフォーマンスがあった」とは言えても，「こういうパフォーマンスをやる」とは言えない。これは単に言葉の問題じゃないんだよ。コンセプトと結果としてのパフォーマンスとは全く別のものだっていうことだ。もしその両者が一致しているというのなら，どうしてM.E.V.*のイヴェントに参加した人たちは革命を起こすまでに至らなかったんだい？　それから，僕はあまり質問されるのは好きじゃないんだけど……。

柳　す，すみません。えと，あの，じゃ，何かあなたの方でお知りになりたいことがあったら，どうぞ……日本の状況とか……。こっちでも，もちろんあなたやディヴィッド・トゥープがやっているようなパフォーマンスはあまり知られてはいないんですが，それでも結構情報としては入ってきてるんです――日本は情報の宝庫ですからね。でも，こちらの状況なんかは，あまりそちらに伝わっていないんじゃないですか？　あ，いけね，また質問しちゃった……。

J　じゃ，ひとつだけ気になってたことをききます。ここの払いは誰がもつんですか？

柳　あ？　ここ？　え一，今日は食い放題ってことでして，あの，free eating……いや，これじゃタダ食いか。えーと，めんどうだから…僕らでもちます！

J　それじゃ，もう1皿もらおうかな。(急に機嫌が良くなる)これは良いね，うまいうまい。……そうだねェ，日本の事か……。確かに僕は日本のアートの状況を知らない。コスギ*とかコンドー*とかは実際に聴いたりもしたけどね。でも，日本に限らず，ヨーロッパでもアメリカでも，その地域によって極だって状況が異なっているとは思えないね。『日本のアーチストは経済的に苦しい』っていう愚痴はよく耳にする。確かにこっち(イギリス)では国の援助を受けてるアーチストは多いよ。デレック*にしてもそうだし，ディヴィッドはもちろん，ハンプトン*やチャーリー*までがそうだからね。まあ，大した額じゃないけど。もらってないのは僕とかね……。

柳　もらってないのはあなたの意志で？　それともお国の？

J　両方だね（笑)。でも，向こうでくれるというならもらってもいいよ。いや，別に日和ってるわけじゃなくて(笑)……僕は，国や政府のやってることはたいがい間違いだと思ってる。でも，彼らの間違いが僕の生活をうるおしてくれるっていうなら，それは「良い間違い」なのさ。でも，正直いえば別に金は欲しくない。食う術は他にいくらでもあるからネ。パフォーマンスは別に商売でやってる訳じゃない……でも，金はたくさんあった方がいいなあ，実際。

柳　日本に来たのは誰かの招待，それとも何か個人的な目的があって？

J　日本じゃ西洋人は受けが良いみたいだネ。田舎から団体旅行で来たような奴でも，1人で道を歩いてりゃ何か特殊な事をやってる人間に見られるらしい。留学生なんかでもそうだ……実際は皆アホなのにネ。……今回来日したのは，日本人の画家の友人の招きなんだ。「こっちで個展をやらないか」てな話があってネ。彼が会場探しにかけずり回っている間，僕はこうしてブラブラしてるって訳さ。実際，彼は僕がパフォーマンス――ロンドンでやったやつだが――で，壁に大きな線香で描いた落がきを，すごく気に入ったらしいんだ。彼には，パフォーマンスのことなんか実際何もわかっちゃいない。僕がイギリス人で自分が日本人であるってことを，何か別のかたちで誤解しているんじゃないかと思う。彼の用意する個展で僕が何かをやりたいようにやったら，きっと彼は2度と僕を呼ぼうなんて思わなくなるだろうし，自分のマヌケぶりと下らなさを知ることになるんだろうな。
(大いに笑う)

柳　おそらく，あなたのその落がきはアール・ブリュット*に見えたんでしょう。でも，演奏なんかにしてもそうじゃないのかな？　つまり，今までにさわったことのない楽器とか，初めて演奏する人とか，そういった場合の方がインパクトのあるものになるということが多いですネ。実は僕も，「第五列テープ」*というテープ・レーベルに演奏を記録したことがあるんですよ。

J　君が演奏したの？

柳　ええ。でも，そのテープに録ったときが生まれて初めてで。

J　そして最後か？

柳　さあ……でも，そんなことは別にどうでもいいことだと思います。僕は演奏と音楽とは全く別のものだと思ってますから。僕は音楽のことはよく知らないんですが……。でも，演奏が音楽になりうるとしたら，僕はもう演奏の経験を持っているから，音楽をしたことになるのかもしれませんね……自分じゃなかなかそういう気持ちにはなれませんけど。

J　演奏と音楽というのは，性交と妊娠みたいなものさ。性交しても妊娠するとは限らないからネ。僕の場合は

***コスギ**　小杉武久(vln, vo他)。現在は米国のマース・カニングハム・ダンス・カムパニイのおかかえとなっているようであるが，昔タージマハル旅行団という日本の先駆的即興演奏集団を主宰していた。即興が服を着て歩いているような人物で，少なからぬ人たちに強すぎる影響を与えたといわれる。

***コンドー**　近藤等則(tp)。現在わが国では最も精力的に活動を続けているフリー・ミュージシャンの1人。海外の変なミュージシャンとのつきあいも広く，その辺の影響もあってか，その演奏は彼の出自であるフリー・ジャズを離れてどんどん雑音に進歩しつつあるそうだ。

***デレック**　デレック・ベイリー(英, g)。1978年に来日し，一部で絶讃一部で酷評大部分で無視された。非常に背が高い。ギターさえ弾かなければ健全な常識人である。

***ハンプトン**　ハンプトン・ヒューズ(英, g)。無弦ギターを演奏するらしい。太っている。

***チャーリー**　チャールズ・ヘイワード(英, per他)。「クワイエット・サン」，「ジス・ヒート」といったマニア受けのするロック・バンドに在籍。比較的印象希薄な演奏をする。

***アール・ブリュット**　仏国のジャン・デュビュッフェという気違い画家が提唱した，非芸術家によるプリミティヴで生々しい作品群の総称。見てみたいものである。

避妊してるのさ。

柳　流産させるって手もありますね。

J　僕は別に「音楽」がきらいじゃないんだよ。「音楽」は「音楽」として評価すべきものもあるのさ。ただ，僕の場合は「音楽」のコンテキストで評価されたら困るからね。もちろん僕は「音楽」だってよく聴くよ。イーノ*とかディキシーランド・ジャズなんかが好きだネ。ただ，「音楽」ってものに感動したことはない。もしあるとすれば，おそらく，ちょうど3歳の誕生日だったかに，父が僕へのプレゼントを買ってきてくれて，その包みを開けた瞬間だったね。……子供用のバイオリンが入っていたんだ。そんなことになんで僕が感動したかっていうと，それはつまり，僕のためにこんな妙なものが用意されたっていう事。少なくとも，その変なものをいじくって音を出すなんておぞましい真似だけは一生しなくていいはずだと，それまで思ってたものだからネ。しかもだよ，思い切ってそれを取り上げて，大人と同じ格好して同じ動きをしたのに，全然違う音しか出ないじゃないか。僕は，それが自分の未熟さのせいだなんて全く思ってなかった。それで，僕の神話は壊れてしまったんだ。構造はそのままでは機能を内包しているとは言えないってことを知った……つまり，世界は僕がはたらきかけてやってもノーマルに機能する訳じゃないって事だ。「正しいアプローチ」が1つしかないっていうのは嘘で，物事は向こうから勝手にやって来るんだ。世界それ自体を構成している全てが，全てのありうる関係ひとつひとつについて誤解しつづけているんだ。「正しい答が何通りかある」っていうんでもなくて，「間違った関係が同時にいくつもある」にすぎない……。まあ，3歳かそこらでそこまで考えちゃいなかったけど，要するに，それが僕のけつまづきの始まりだった訳だ。そこに始まって，カトリシズムをはじめとして，とにかくあらゆる宗教体系とか，神秘主義を捨てちまったのさ。つまり，アプリオリに決定された何かを信奉する以外に関わり方を持たないようなものをネ……。

柳　演奏行為も一種の宗教的体系なんでしょうか？

J　そうだね，演奏に限らず，絵画だって，舞踏だって，あらゆるアートは宗教あるいはそれに類似した体系のアナロジーだね。皆『目的の王国』を持っているように思える。

柳　皆，自らの聖戦（ジハード）を全うするしか能がないみたいですね。

J　『聖』⇄『俗』といった区別だって，それ自体宗教的なものさ。この種の二項対立というのは，もともと『聖なるもの』を補強すべく仕組まれていると思う。というのは，僕のような『俗人』には，とてもこんな悪知恵ははたらかないからネ。まあ，いずれにせよ「自分の聖戦」なんかにかかずらってるアカデミックな人間は，信用しないことにしてるネ。

柳　演奏家なり音楽家なり，いわゆる芸術家というのは，もともと宗教的に派生したものだと思うんです。とすれば，あなたのようなタイプのパフォーマーはもはや新しいカテゴリーを作る事によってしか受け入れられない存在なんじゃないでしょうか。もうアーチストではなくて，アナーキストとかテロリストとしての性格が強いように思えるんですが。

J　カテゴリーや社会通念の網にからめとられてしまえば，そこにはもう「聖⇄俗」を云々する余地が生じるのさ。言葉の問題じゃないんだ。（かなり酔っている）

柳　じゃそこに，垂直的に浸入するための戦略というのはないんでしょうか？

J　え？　なに？（となりの席の女の子の方に見とれていて聞いていなかったらしい）

柳　（いらだって）　だから，その「囲い込み」を逃れる方法というのをどう考えているのか，伺いたいんです。

J　えーっと，例の画家とは別人だけど，やはり日本の友人で，妙な宗教めいたことをやってる奴がいて，そいつの言うことには，神が徹底的に卑下されて，神話というのがちょうどワイ談に匹敵するようなものがあるんだな。まあ，ありそうな体系で，その実，中味が逆立ちしてるというのは面白い。けど，それにしたって嘘っぽいしね，僕の方法はまた別だ。

柳　その日本人のやっているのは一種のパロディなんだと思いますが，あなたはそれじゃあ，パロディもあまり有効な手段とは考えていないんですね。

J　ケースによるけどねェ……。というのは，中にはある程度成功している例もあると思う。ICPのテンテット*はその意味じゃ面白かった。つまり，パロディの中でパロディをやったりしてて，なかなか構造的に……ま，センスは古いみたいだけれど。でも，ブロイカー*がやってるようなのは，パロディとして成立してしまっている点があって，失敗じゃないのかなあ。

柳　パロディの失敗というのはわかりますね。あなたの言うパロディの真価とは，パロディの成立するところさえも無化してしまうということなんでしょうか？

***第五列テープ**　アールブリュットの一種。ドシロート・ドーブツなどの演奏を収録したテープ（レーベル）。ばかげた演奏が多い。テープ代のみで頒布しているので商売にならない。

***イーノ**　ブライアン・イーノ（英）。ハゲ具合と教祖的なもちあげられ方がますますもってテリー・ライリーに似てきたインテリ・パフォーマー。中身はサティとサイバネチックスが主で，いんちきくさい。特に新しくないところやブチブル的・保守的なところがないらしく，結構ウケている。

***ICPテンテット**　オランダのICP（インスタント・コンポーザーズ・プール）という即興演奏集団に属するミュージシャンが中心となって結成された，多国籍オーケストラ。ポピュラー音楽を素材にしてさまざまな踊れる冗談音楽をジャズっぽく演奏する。日本でキャバレー回りをしてもおかしくない楽団である。

***ブロイカー**　ヴィレム・ブロイカー，オランダのサックス奏者。相棒のレオ・キュイパース（p）と組んでよくパロディーじみた演奏をするが，どことらくわざとらしい。それは，パロディーが彼の「共産主義的プロパガンダ」の一環を成しているせいらしい。

J　理想的にはそうだ。今，いわゆるパロディってのは，原典を知ってる連中の優越感をくすぐるか，あるいは単なる駄洒落に終っているかのどちらかだ。結局，前者はディレッタンティズムに陥るし，後者は風俗・流行でおしまいさ。理想的にはパロディでありながら独自のものであればいいのかもしれないが，それは多分，偶然の産物になるだろうな。もしそれを方法として追究するとしたら，かなり洗練された技術として追究されることになるだろうし，実際にそういうことをやってる連中も結構多いネ。でも，僕はそれじゃ同じことだと思うし。そういうパロディみたいなことをやるにしても，パロディの「パ」のあたりでやめたりやめなかったりしてる程度の事さ。……パロディの話はもうこれくらいにしておかないか。

柳　じゃあ，話を戻します。あなたは，それでは「独自の方法」といったものは求めていない訳なんですか？

J　「その人しかできない名人芸」なんて無意味だネ。「誰でもできる，誰がやっても同じ，誰もがいつでもどこかでやってる凡人芸」みたいな方法こそ素晴らしいね。ただ，そんなものがあるかどうか知らんけど……。(次第に話に集中できなくなってきている)

柳　自分の足をすくってひっくり返したいと思いませんか？

J　そんなことしたら痛いじゃないか！（笑）それもいいけどネ。ただ，方法にしがみつくのはおかしいと思うよ。というのは，方法というのは目的を前提としてるだろう？　僕は『目的の王国』の住人じゃないんだって，さっきも言ったろ。

柳　んー，それはわかります。でも，ある行為は必ず当面の目的を持っているという見方も成立するんじゃないでしょうか？

となりの席の女*　あんたたち，インテリねー。何話してんのか全然わかんないけど，何の話してんのー？　この人（と，ジョンストンを指す）どっから来たの？

柳　この人はイギリスから来た人で……。

J　『目的の王国』には王様がいる。この王国をくずすには王をいくら殺したってだめさ，国民はすぐにでも別の王をつれてきて君臨させるだろう……。それに，王様がいなくても国はなくなりはしない。要するに，王を消しても無意味なんだから，国民の方を消してしまえばいいのさ。国民のいない国はない。王はそれでも残ってるかも知れないけど。でも，そのとき王はもはや無為にさすらうことしかできないだろう。そんな王の名を「主義」とか「摂理」とか「愛」というんだ。

となりの席の女　「愛」。いいわあ，「神(エホバ)の愛」は永遠のテーマよネ！（日本語）

J　神(ゴッド)はホモなんだよ。（英語）

となりの席の女　何言ってんのー，この人？（やや酔っている）

柳　何でもないなんでもない，この人はゲージュツカなんだから……あなた，邪魔しないでネ。この対談，本に載せるかも知れないんだから。

となりの席の女　へえ，ゲージュツカ？　本に？　すごいわー。あたしたちもさあ，昔，ミニコミ作ってたんだけどさあ，てんで皆テキトーでさあ，あたしが「定期的にやってかなきゃ意味がない」って言ったらさあ……。

J　「方法」というのは結果的に模倣されなくてはならない。そしてまた，論理的に裏づけられなくてはならない。「方法」は個人のものではないはずだ。「方法」は「方法」を発展させはするが，決してそれ自体を解消しはしない。「方法」は順次事物を関係づけるが，それはその論理に従った一連の選択であり「事物の党」を構成する。しかもそれは，その事象そのものを正当化するダイナミズムをはらむ。どうせ正当化はひとつの可能な誤りにすぎない。「方法」の無化は今の語法では不可能だ。異なった言語が欲しい……もはやコンセプトでは追いつけないような。

柳　語りえない……語りえないこと？（酔っている）

J　だから，今のやり方なら語るというのは全く別の次元の問題なんだ！（怒る）

柳　じゃあ，あなたと話をしても何も得るものはない！　あなたは……

J　（さえぎって）これが僕の今やっていることなんだ，ということについて君は反論できるだろうか？　できないはずだ。全ての関係は後からついてくる。関係を既定のものとしたら，あらゆる行為は仮説の証明を目的とした実験と同じになってしまう。……実験というのは結果を暗黙の前提にしている。だから実験的なパフォーマンスなんてものは皆インチキなんだ!!　（完全に酔っている。真っ赤である）

柳　あんたもそのインチキの仲間なんだ。あんたは言葉に酔ってるだけだ！　皆，ホンネが聞きたいんだ。あんたが狂ってるのか，コトバが狂ってんのか！　え！　パフォーマンスだかなんだかやってもらおうじゃないか！（激昂している。真っ赤っ赤である）

となりの席の女　何イカッてんのー，２人とも？

J　アートなんてインチキさ。別に今に始まったことじゃない。要するに，どういう風に説得力をもたせるかだ。便器はアートじゃない。遠近法はアートじゃない。手品はアートじゃない。「しゃぶしゃぶ」はアートじゃない。サケはアートじゃない。お前はアートじゃない。俺がアートなんだ!!

東野(インタビュアーの同行者)　ショバを変えましょうよ。

柳　よーし，「ヘッドロック」*行こう，「ヘッドロック」！

J　（突如，柳にヘッドロックをかけて締めあげ始める）

柳　いでーよー!!　やーみろ〜〜〜!!

となりの席の女　ばっかみたい，あんたたち。

END

***となりの席の女**　上智大学仏文科３年，吉田由香理さん(22歳)。デヴィッド・ボウイー・ファン・クラブ会員。酒豪。

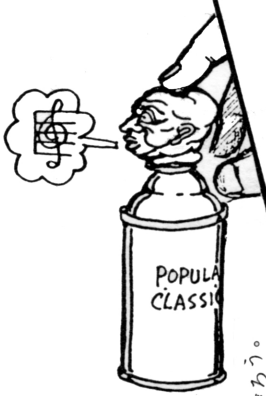
***ヘッドロック**　新宿のアナクロ・ロック喫茶。長髪やロンドン・ブーツといった過去の遺物にお目にかかれる隠れた名所。

"FREE MUSIC MEETING" REPORT

☆去る８月，「フリー・ミュージック・ミーティング」なるイベントが京都で催された。

☆フリー・ミュージックにポリシーなんてあるわけない……
というより，そもそも「フリー・ミュージック」という名称自体，ポリシーとは無縁のイイカゲンなものなのである。
「フリー・ミュージック」とは何か，という質問に対する答えは十人十色であるに違いない。
その点を不問にして，あたかも「フリー・ミュージック」が「一つのもの」であるかのように暫定した上で「フリー・ミュージック・ミーティング」は行われたようだ。
これは「作業の深化・深展」以前の問題だ。いわば足もとを確かめずに走り出してしまった訳である。

★それはそれでいいのではないか。
★パワー・ミュージックが多くて疲れるねー。「ミュージシャン」のお祭りであっても
★単に自称「フリー・ミュージック」という共通のもの（!?）を構わないんじゃないの。
★皆「フリー・ミュージック」，その場で何とかうまくいかなきゃウソだ。追求してるんだから，その場で何とかうまくいかなきゃウソだ。
★まっとうな人間のやることじゃありませんね。
★バルサンは「フリー・ジャズ」駆逐に役立ちます。
★眠い……



FREE MUSIC MEETING

この日本においても，FREE MUSICに携わっている人々は数多く存在しているものと思います。しかし，ミュージシャン相互の連帯を欠き，それぞれに孤立してしまっているのが現状です。そこで今回，下記のような目的でFREE MUSIC MEETINGを開催します。参加を希望する人は，なるべく早目に，下記問い合せ先までくアンケート用紙記入の上，御連絡下さい。
お互いの作業を見つめていくことにより，自己の作業の深化・深展もまた，可能になることだと思います。

FREE MUSIC MEETING を開催するにあたって

河野優彦

正直言って僕は，この企画を実行するのは，あまりに煩わしくてやりたくありません。多くの尊重すべき人に出会い，多くの細々とした問題をひきずりながら，又しても多くの問題をかかえ込んでしまうだろうからです。これは，演奏行為を企画する時にも感じる一面の心理現象だと思います。
それにもかかわらず，今回こうした企画を持ったのは，新しいムーブメントとしてのFREE MUSICを楽しみ，育て，作業していくことが，日本の中で，どのように実施されているのかを確認したいと思ったからです。そこでは様々な響き音を聞くことができ，又自らの音を他へ伝達することができるでしょう。
以上のような趣旨なので，フェスティバル形式で開催するという考えは，今回は持ちません。できれば，合宿だと思っていただいた方がいいと思います。個人ができる限り自由に，又充分に演奏でき，話し合う場を持てるようなMEETINGになるように祈ります。

DATES & LOCATION
8月1日(金)・8月2日(土)・8月3日(日)
於：尚賢館（京大講内）

PROGRAM
〈第一部〉各楽器群での演奏。
〈第二部〉任意のメンバーによる小編成での演奏及びソロ，オーケストラ演奏。
〈第三部〉ディスカッション

問い合せ！
安藤博一
〒157 東京都世田谷区砧6－22－10

★といった様々の（しかし量的には決して多くない）意見が交わされたこともあったが，実際には殆ど「話し合う場」ではなく，単にセッションの積み重ねに終った感が強い。

☆ただし，「演奏が全てだ」とか，「別に考えをしゃべらなくても演奏に表れるはずだ」いわゆる物質化錯視というやつだ。
それは間違っている。ミュージック・ミーティングは「フリー・ミュージック」という人達の間でも
それは明らかに「フリー・ミュージック」を標榜する人達の間でも
☆結果的に「フリー・ミュージック」を標榜する人達の間でも
定量分析ではなく定性分析に終った。
それはそれなりに有意義ではある。
☆今後は「フリー・ミュージック」を深めてゆくだろう。
分裂・内紛が起きて，事態はますます混迷を深めてゆくだろう。
それは悪いことではない。

☆「フリー・ミュージック・ミーティング」に参加した人々は，何を求めていたのだろうか。
☆それにしてもフリー・ミュージックとは何だろう。
「八月革命」という言葉にも似た響きがあるが，
☆それにしてもフリー・ミュージックとは何だろう。
知らない人がいたら教えてください。

通信○○○

INFORMATION

☆第五列テープは実費のみで販布されていますが，**アーバ・ウィクワン**委託分に関してはテープ代加算されています。向こうは**商売**なのですから，仕方ありません。

☆第一期**第五列テープ**が早くて10月中，遅くとも年内に，5—6本一挙に発表されます。最終的なラインナップは未定ですが，**いむぷろぅぁいずと大梅日いず・重力と毛がはえた**（いずれも同名のコンサートの記録）といったテープが含まれる予定。

☆発刊時期の不確実さに関しては**同時代音楽**誌に匹敵する（がもちろんあれほど極端ではない）雑誌もどき**第五列**の1号（通算第3号）が10月初旬に発行のはこびとなりました。B5版約30ページ，予価500円。執筆者は**芦川聡，大塚正，金野吉晃，園田佐登志，高橋昭八郎，竹田賢一，羽生英一，藤本和男，村中文人**といった，知っている人しか知らない面々。

◎非難・絶賛・誹謗中傷・投稿・女子高生・ひさうちみちお・現金書留などの宛先は：
〒020 盛岡市中野1-10-31 金野吉晃　または
〒166 杉並区高円寺南4-34-22（高坂方）藤本和男　まで。どーぞ。